

☆6世紀末～7世紀前半の推古朝を中心とする、日本初の仏教文化

1. 建築 [図表P.51②]

☆各豪族は競って一族のための寺院を建立するようになった。このような寺を1 氏寺 という。

①聖徳太子——奈良の2 法隆寺 (斑鳩寺)、大阪の3 四天王寺

②蘇我氏——4 飛鳥寺 (または法興寺、のち平城京に移り「元興寺」)

③秦氏——5 広隆寺

※飛鳥時代当時のまま残っている建築物はなく、飛鳥時代の面影を一部に残すにとどめている。

Q1. 重厚な寺院建築物を支えるために渡来した新たな建築技法とは?

A1. 図表 P.52の写真を見てもわかるように、寺院の建造物は瓦葺きのためかなりの重量になる。従来
の大型構造物は、地面に穴を掘ってそこに柱を埋め込む6 掘立柱 建築が行われていたが、
寺院ではその重量のため柱が沈んでしまっ不安定になる。そこで土台として大きな石を置き、その
上に柱を乗せる7 礎石 建築の技法が採用された。[図表P.52]

【伽藍配置】 [図表P.52①]

飛鳥寺、四天王寺、法隆寺などの飛鳥時代前後の寺では仏舍利 (釈迦の骨)をおさめる8 塔 が
伽藍の中心にあるのに対して、奈良時代の東大寺や大安寺では仏像をまつる9 金堂 が中心の
位置を占めるようになってきている。

◎再建かそうでないか論争のあった法隆寺では、再建前のものとおもわれる古い伽藍が発掘され、再建説
が有力となった。

Q2. その発掘された古い伽藍跡を何というか。 [図表P.52②] A2. 若草伽藍跡

Q3. その伽藍配置はどこの寺と同じものであったか? A3. 四天王寺

2. 彫刻

①10 北魏 様式～力強く端厳、男性的。杏仁形の眼、仰月形の唇。 [図表P.54]

*11 法隆寺金堂釈迦三尊像 ともに13 鞍作鳥 (止利仏師) 作と伝

*12 飛鳥寺釈迦如来像 えられる飛鳥文化を代表する金銅像。

*法隆寺夢殿救世観音像…明治時代に岡倉天心とアメリカ人フェノロサが発見。木像。厩戸王 (聖徳太子) の等身像と伝えられている。

◇ プリントや図表の説明にあるように、礎石は瓦葺きの重量のある屋根を支えるために置かれています。礎石と柱の接する面は石および柱に凹凸があつてかませている場合もありますが、両方平らでただ石の上に乗っているという場合も少なくありません。ということは逆の言い方をすると、礎石の上に乗せるのであれば瓦葺きなどの重量のある物でないと強風でズレたりすることもあるということです。

◇ 「伽藍」とは寺院の建築物のことです。図表 P.52①をみると、飛鳥文化の3タイプ (飛鳥寺式、四天王寺式、法隆寺式) では塔が中心にあつたり、塔と金堂が並び立っているのに対し、次の白鳳文化、さらにのちの天平文化の寺院では、明らかに金堂が中心的位置を占め、塔はほとんど中心から外れていることが見て取れます。日本の寺院では「釈迦の骨」よりも仏像が崇拜の対象であつたことがわかります (現在もそれは続いているようです)。

◇ 高校日本史で取り上げられる仏像制作者 (仏師) は限られています。その最初の人物が飛鳥文化の鞍作鳥です。時代と作品を関連させてその名を頭の中に刻みましょう。また、飛鳥文化から鎌倉文化までは仏像がいっぱい図表に紹介されていて、一部の彫刻好きを除いては「いちいちいつの何だとか覚えられん!」と文句の二つ三ついいたいくなるものです。とりあえず各文化でできれば二つ、得意な仏像をつくっておきましょう。飛鳥文化であれば、北魏様式・南朝様式それぞれ一つずつの二つ、とか。

◇ 図表P.54「救世観音像」の説明文にあるのですが、この仏像は長い間秘仏とされてきました。木綿の布が巻かれ、布をとるとたたや災いが起こるとされてきました。それをフェノロサは徹底的に説得を行って立ちこめる埃の中、その布を巻き取って図表 P.54の姿を明らかにしたのです。寺の人々にとってはそれはそれは恐怖だったでしょうね。すでに2年生の「日本史A」で学んだフェノロサは日本画に対する海外の高い評価を政府に説き、日本美術の価値を再認識させて、東京美術学校の創設に尽力した人物ですが (覚えてましたか?)、彼の専門は哲学、法学、政治学でした。